

72巻4号

2017年10月1日

YAA 天文会報

(10~12月号)

774号

〒226-0016

横浜市緑区霧が丘 4-1-7-402

正木 仁 方

Mail: masaki@e08.itscom.net

HP: <http://home.n03.itscom.net/yaa/index.html>

横浜天文研究会



銀河 夏から秋へ

撮影：山形幹夫

観望ガイド

正本

早いもので、今年も3/4が過ぎました。日の入りもすっかり早くなり仕事帰りの時刻にはもう真っ暗です。

まず10月ですが、4日は中秋の名月です。今年は10月になっての十五夜さまですから、秋らしい雰囲気の中で迎えられそうです。ちなみに満月は6日午前3時ですから、十五夜さまの時点では、満月にちょっと足りない端が少し欠けた姿になります。9日は月がおうし座のヒアデス星団の前を通過していきますので、星食がいっぱい起きます。

11月は中旬に明け方の空で、木星と金星が並んでいます。一番接近するのは13日の明け方、17日は新月前の細い月も近くにいます。季節も晴れの確立が高くなってきますから、薄明の微妙な色の変化とともにカメラに収めたいですね。

流星群の状況ですが、10月は以前ジャコビニ流星群の名で有名だった10月りゅう座群があります。極大が8日ですが、今年は満月を過ぎたばかりの月明りに邪魔されてしまいます。つぎに21日20時頃にオリオン座流星群が極大を迎えます。こちらは月明りの影響がないため、条件は最良です。この流星群のピークはなだらかな活動をしますから、前後数日は1時間に20個程度の同じような出現数とおもわれます。

11月はおなじみのしし座流星群です。極大は18日01時と予想されており、ちょうど新月にあたるためオリオン座群同様に条件は最良です。しかし活動は近年あまり期待できない状態が続いています。1時間に10個程度でしょうか… しし座流星群は痕を残す明るい流星が印象的です。

12月になるとふたご座流星群がひかえています。極大予想が14日15時と日本では昼間ですから、14日の明け方、そして夜が見頃で、1時間に40～50個程度の活動が見れるかどうか、月は新月前ですからこちらの条件は良いです。そして一年の締めめの流星群はこぐま座群です。23日0時が極大と予想されていて、この時刻には月も沈んでいるので条件は良いです。1時間に5個程度の出現ですが、たまに活発な活動を見せてくれます。

いずれの流星群も、観測時には防寒対策をしっかりと準備してください。

【10月例会】

10月14日（土）18時00分～19時30分

東戸塚地区センター2F 小会議室

ちょっとやりすぎ感あり？

山形幹夫

表紙の写真は夏から秋へ移り行く天の川銀河が中天高く横切るタイミングで撮影したものです。天の川銀河の中心から離れていくに従い、赤いH α 輝線で光る星雲が多くみられるようになります。丁度その境界は白鳥座辺りでしょうか。画面左側から1/5位の所に分かれ目があるように見えます。はくちょう座にはたくさんのH α 領域があることがわかります。続いてケフェウス、カシオペヤ辺りにもH α 領域が点在し、ペルセウスへと続きますが、カリフォルニア星雲までは写っていません。

下の写真は表紙写真の元画像の1枚です。撮って出しのJPEG画像で、画像処理はしていません。画面左下の明るい星はベガで、こと座の形も分かります。下方の中央から右寄りにあるのは北極星、カシオペヤ座の形も分かります。20mmという広角レンズで撮影していますが、広がり感はあまり感じられず構図は難しいですね。ところが表紙のように画像処理後となると、赤い星雲を出すために暗い星々まで輝度が持ち上げられているために、輝度のメリハリが無くなって、どこに何の星座があるかがハッキリしません。これはやはり画像処理のやりすぎ、でしょうか。

また下の写真は撮って出しの画像にもかかわらず星々の分離が十分にあり、天の川が白い雲状ではなく、暗黒星雲もそれなりにはっきりして、もうこれはデジカメに使用する撮像素子の進歩が素晴らしいと言わざるを得ないでしょう。ニコンからも最近更に高精細な素子を搭載した新型カメラが発売されましたが、今後どこまで行きつくのかは底が見えない状況かな、と個人的には思います。まあレンズの性能が追い付かなくなるので、そちらの方が大変かとも思います。



【表紙写真撮影データ】

撮影日 2016年11月
3日 20時42分撮影開始
Nikon D810A
AF-S NIKKOR 20mm
f/1.8G ED 絞り:F2.8
ISO3200 露出60秒×4枚
コンボジット
撮影地:長野県入笠山

太陽黒点

観測者：藤森 賢一（諏訪） 機材：8cm屈X67 15cm投影

日	2017年6月					2017年7月					2017年8月				
	N		S		全	N		S		全	N		S		全
	g	f	g	f	R	g	F	g	f	R	g	f	g	f	R
1	0	0	0	0	0	-	-	-	-	雨曇	-	-	-	-	曇
2	1	6	0	0	16	1	2	0	0	12	0	0	1	4	14
3	1	10	0	0	20	-	-	-	-	曇	0	0	1	4	14
4	1	14	0	0	24	-	-	-	-	雨	0	0	1	4	14
5	1	11	0	0	21	0	0	0	0	0	0	0	1	4	14
6	1	9	0	0	19	0	0	1	2	12	0	0	1	2	13
7	-	-	-	-	曇	0	0	1	5	15	0	0	1	2	12
8	-	-	-	-	雨曇	0	0	1	18	28	-	-	-	-	雨曇
9	0	0	0	0	0	0	0	1	25	35	0	0	1	3	13
10	-	-	-	-	欠測	0	0	1	34	44	0	0	1	3	13
11	0	0	0	0	0	0	0	1	27	37	0	0	1	2	12
12	0	0	0	0	0	0	0	1	28	38	0	0	1	2	12
13	0	0	0	0	0	1	14	1	18	52	0	0	1	2	12
14	1	2	0	0	12	1	7	1	20	47	-	-	-	-	曇
15	2	8	0	0	28	0	0	1	15	25	-	-	-	-	雨
16	2	9	0	0	29	-	-	-	-	曇	-	-	-	-	曇
17	2	7	0	0	27	0	0	1	4	14	1	30	0	0	40
18	-	-	-	-	曇	0	0	1	1	11	1	28	0	0	38
19	2	8	0	0	28	0	0	0	0	0	1	32	0	0	42
20	2	5	0	0	25	0	0	0	0	0	1	34	0	0	44
21	-	-	-	-	雨	0	0	0	0	0	2	28	0	0	48
22	2	4	0	0	24	0	0	0	0	0	-	-	-	-	欠測
23	-	-	-	-	欠測	-	-	-	-	雨	2	34	0	0	54
24	1	2	0	0	12	0	0	0	0	0	2	38	0	0	58
25	-	-	-	-	雨曇	-	-	-	-	曇雨	-	-	-	-	雨
26	1	9	0	0	19	0	0	0	0	0	2	23	0	0	43
27	1	11	0	0	21	0	0	0	0	0	2	15	0	0	35
28	1	5	0	0	15	0	0	0	0	0	1	18	0	0	28
29	1	3	0	0	13	-	-	-	-	曇	1	2	1	2	24
30	-	-	-	-	雨曇	0	0	0	0	0	-	-	-	-	欠測
31						0	0	0	0	0	2	20	1	2	52
平均	16.0		0.0		16.0	2.2		13.2		15.4	21.0		7.3		28.2

日月星の伝承を訪ねて (53)

横山好廣

○2015年10月5日

神奈川県足柄上郡開成町岡野 ②

前号の続き。話者は岡野地区N家で当時88歳（昭和2年生まれ）の女性。

●「アケムツ」について

「アケムツに起きないと、朝ご飯に間に合わない」と云われ、朝早く起きた。空が明るくなる前に、東から南に寄った空に輝く一つの星を「アケムツ」といった。「アケムツ」を早起きの目安にして、ご飯の支度に取りかかった。

88歳になる女性からの「アケムツ」についての話である。この話からは「アケムツ」という呼称が江戸時代に使われていた不定時法の「明け六つ」を意味することと、丁度その頃、東天に輝く明けの明星、金星のことも指していることが判る。明けの明星は、朝飯の支度の目安にもなっていた。

このように金星を朝食の支度の目安にしていた例は他にもある。その名は「メシタキボシ」で、かつて、山形県・飛島で採録しYAAの会報にに報告したことがある。この名は、静岡県等にも例があり、直截的で素朴な味がする。

一方、「アケムツ」には、時刻を意識した都会的な雰囲気を感じる。岡野が城下町・小田原に遠くない位置に在ることに関係しているのかも知れない。

「アケムツ」には、日の出前の或る時刻という意味の他に、一日の始まりという意識もあったのではと考えている。太陽とともに生活が始まるという感覚が今よりも強かった頃に、空の明るさを手掛かりにして一日の始まりを判定していたことは、ごく自然なことであったと思う。丁度その頃に、東天に輝く明けの明星「アケムツ」は、一日の始まりを象徴し、時刻の目安になって、人々の役に立っていたのではないかと想像する。

「明け六つ」は、日出前大体35分に相当する。それは、太陽が昇る前に時刻を判定することになるので、その難しさは指摘されていた。しかも、季節によって日出の時刻には違いがあり、夏至と冬至の頃では大体2時間半位の違いがある。現代人から見ると、このような時刻制度は不便極まりないように思えるのだが、庶民には一日の始まりは「明け六つ」で通用していたので、生活感覚的には問題はなかったと考える。

また、金星は、明けの明星として東の空に留まることはないので、時刻の目安として当てにならない一面もある。しかし、一日の始まりを象徴する星「アケムツ」の再出現は、朝早く起きる目安が再び見えたことで人々に安心感を与えたのではないだろうか。だから、「アケムツ」や「メシタキボシ」の名が伝承されてきたと考える。星は庶民に身近な存在であった。

尚、明け六つは、天文用語で常用薄明に相当し、天文薄明とは別である。

(開成町岡野の稿、了)

天 象

相原 榮

10月

水星: 中旬以降夕方の西南西天(低高度) $-1.4\sim-0.4$ 等 おとめ→てんびん座
金星: 明け方の東天で高度を下げる -3.9 等 しし→おとめ座
火星: 明け方の東天 $+1.8$ 等 しし→おとめ座
木星: 太陽方向 -1.7 等 おとめ座
土星: 夕方の南西天 宵に沈む $+0.3\sim+0.4$ 等 へびつかい座

6日 03h40m 満月 明けの東天で金星・火星の大接近	20日 046h12m 新月
8日 11h20m 寒露 21h 10月りゅう座流星群が極大の頃	21日 14h オリオン座流星群が極大の頃
12日 21h25m 半月(下弦)	23日 14h27m 霜降
18日 明け方の東天低空で月・金星・火星が 集合	24日 夕方の南西天で月と土星の接近
	28日 07h22m 半月(上弦)

11月

水星: 夕方の西天 $-0.4\sim+0.0$ 等 てんびん→さそり→へびつかい→いて座
金星: 明け方の東南東天低高度 -3.9 等 おとめ→てんびん座
火星: 明け方の東南東天で高度を上げる $+1.8\sim+1.7$ 等 おとめ座
木星: 5時過ぎ東の空に昇る -1.7 等 おとめ→てんびん座
土星: 夕方の西天 18時頃に沈む $+0.4\sim+0.5$ 等 へびつかい→いて座

4日 14h23m 満月	15日 明け方の東天で月と火星の接近
5日 おうし座南流星群が極大の頃	17日 明け方の東天低空で月・金星・木星 が集合
7日 14h38m 立冬	20h しし座流星群が極大の頃
11日 05h36m 半月(下弦)	18日 20h42m 新月
12日 おうし座北流星群が極大の頃	22日 12h05m 小雪
14日 明け方の東天低空で金星と木星の大 接近	27日 02h03m 半月(上弦)

12月

水星: 後半は明け方の東南東天で高度を上げる $+0.0\sim+5.8\sim-0.3$ 等 いて→へびつかい座
金星: 明け方の東南東天低空 -3.9 等 てんびん→さそり→へびつかい→いて座
火星: 明け方の東南東天 $+0.7\sim+1.5$ 等 おとめ→てんびん座
木星: 3時半頃東の空に昇る $-1.7\sim-1.8$ 等 てんびん座
土星: 太陽方向 観望困難 $+0.5$ 等 いて座

4日 00h47m 満月	20日 12月かみのけ座流星群が極大の頃
7日 07h33m 大雪	22日 01h28m 冬至
10日 16h51m 半月(下弦)	18h こぐま座流星群が極大の頃
14日 09h ふたご座流星群が極大の頃	26日 18h20m 半月(上弦)
18日 15h30m 新月	